

# ブレインストーミングと モラハラの狭間にあるもの

ジャーナリスト

三木寛郎

## 捨てるための極論

社会人になった時、初めて筆者に付いた肩書きは「コピーライター」だった。小さな広告代理店の制作部に所属し、担当する案件についての資料を理解し、キャッチフレーズや文章を書くのが仕事だった。

それが「クリエイティブ・ディレクター」になり、「プランナー」になり、そして「プロデューサー」と呼ばれるようになった。

この「カタカナ」の肩書きがステッブアップするたびに、担当する件数が倍増していき、統括する制作チームの人数も増えた。様々なジャンルの情報を扱うことから、広範な資料を読みあさり、それを表現していくために情報を噛み砕き、スタッフとともに会議を開き、様々なアイデアを持ち寄って検討するのだ。こうした企画会議の以前にも、もつとラフな

いわば「雑談」のような会議も開かれる。ブレインストーミングである。

参加者が一切の制約を受けず、自由気ままな発想でアイデアを出し、それを参加者が採むことでアイデアをブラッシュアップしていく作業である。当然ながら、最初から採用にまらない前提の捨て球もある。良いアイデアが出ずに行き詰まった際に、敢えて無駄とも思える案を出したこともある。そうやってさまざま方向性を探るのだ。これは企画会議以前の内容であり、基本的にその



ブレインストーミングの参加者はそこで出された種々雑多のアイデアに対して評価も是非も付けることはないのが前提である。「その案はないだろう。ではどうしよう」という流れで反面教師のように次の新しいアイデアを生み出していくことは少なくなかったと記憶している。

筆者自身も代理店勤務時代に、他人が聞いたらどう思うだろうというような危ない内容のブレインストーミングを幾度も経験した。そうやって「叩き台」を作ることから、本当の意味での企画が生まれてくる作業である。

ところが、この会議の席上で出てきた「叩き台」とも言うべき発言を捕まえて鬼の首を取ったように騒いだ人々が居る。件の東京オリンピック開会式の企画におけるアイデア会議での発言である。

辞任に追い込まれたクリエイティブ

ブ・ディレクターと女性演出家の確執のせいだとする議論もあるが、そもそもブレインストーミングの段階で出てきた話を外部に漏洩させ、それを論う姿勢はいかなるものである。

## 外部に出るはずのない

### 荒唐無稽なアイデア

発明王として知られるトーマス・エジソンに、「私は失敗したことがない。ただ、1万通りの、うまく行かない方法を見つけたただけだ」という言葉がある。そのうまくいかない1万通りの方法をいちいちほじくり出して、あれこれ言うのは愚の骨頂である。優れたアイデアを生み出すための踏み石とも言うべき発言を、それも1年以上も前のオンライン会議での発言を、よくもまあ発掘したものだと思うし、その行為自体がか

なり悪意に満ちたものではないのだろうか。

さらにこれによって、わざわざ言わずもがなの身体的特徴を云々され、組上に乗せられた女性芸人もとんだとばつちりである。

重ねて悪いことに、メディアやジャーナリズムまでもが「このような企画は、アイデア出しの段階であつても口に出すべきではない」などという論調で煽り立てるものだから、世のクリエーターと呼ばれる人たちは戦々恐々、たとえアイデア出しのための雑談に近い会話であつても、迂闊なことは言えなくなつていのが現状ではないだろうか。

これは由々しき事態である。東京オリンピックの開会式にとどまらず、多くの創造性のある企画が生まれるはずの現場から、自然にして無駄な発想の芽が摘まれてしまう。もちろん、こうなつては取返す目出しを受け、そのことで新しい発想を生み出そうとする発言にも大きな規制が掛かつてしまう。

本来自由な発想が求められ、様々な味わいのある素材が組上に上るべきところで、最初から篩ふるいにかけられ

た同系の味を持つ素材しか登場してこないことになってしまふ。「これはダメだろう」という時点から発想してこそ、既成の概念にとらわれない新しいものが生み出されていくものではないだろうか。

新しいアイデアを生み出すために本当に必要なのは、その篩に残ったカスの方なのではあるまいか。全員横並びで手をつないでゴールする徒競走では決して世界記録は生まれな

## 21世紀の魔女狩り

こうした、いわばモラハラのような偏った理屈が日本の社会に蔓延し、アイデア出しの段階における不謹慎であつたり、異端であつたりという、「無駄な発想」や「失敗を恐れない考え」が頭ごなしに否定されてしまふことによつて、奇想天外な発想からスタートする「ものづくり」が生まれにくくなつてしまふのは恐ろしい事態である。

このままでは、これまで世界の中心で高く評価されてきた、日本ならではの独創性や特異性のある「ものづくり」が影を潜め、どれもこれもが

横並びの月並みな開発しかできなくなつてしまひはしないだろうか。

新たな産業革命が進行するといわれる中で、未来に向けてカーボン・ニュートラルな社会をいかに構築していくのか、そうした大切な時期に、世界が真似することのできない独創的なアイデアを生み出す土壌が、日本から消えつつあるのではないかと危惧するのだ。

かつて「仕分け」の騒動の折に「2番じゃ駄目なのですか」という発言があつたが、このような状況では2番どころかどれもこれも凡庸な発想しか生まれない日本になつてしまひかねない。



ある意味において、その体型をも含めてセールスポイントとし、日本のみならず世界を舞台に活躍する女性お笑い芸人を貶め、侮辱することになつたのは、ブレインストーミングの段階で、そもそも外部に出るはずのない発言をLINEのログから発掘し、白日のもとに晒すことで話題性を獲得することに成功したメディアの側に大きな責任があるので

はないだろうか。

このような「魔女狩り」とも言える行為がまかり通り、自由闊達な発想を阻害する日本社会の現状は、決して未来に向けて建設的なものには思えないのだ。

それこそ生物多様性やLGBTを引き合いに出すまでもなく、少なくとも発想の出発段階では「何でもあり」であつてよいのではないだろうか。自由な発想から玉石混交、様々なアイデアが並べられ、そこから取捨選択が行われ、最終的に世界に冠たる独創的な結果が引き出されればよいのだから。もちろん、その段階で人を誹謗中傷したり、揶揄したりするような内容であつてはならないことは言うまでもない。